

表48 食事について

	全 体	内 科	外 科	精 神 科	混 合
看護婦が中心になって患者が理解するまで説明すべきである	61(3.9)	15(2.4)	21(4.4)	23(7.1)	1(1.1)
栄養士と看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである	1,094(70.5)	430(69.2)	339(70.6)	239(74.2)	59(64.8)
栄養士が中心になって説明すべきである	353(22.7)	162(26.1)	111(23.1)	47(14.6)	27(29.7)
そ の 他()	29(1.8)	12(1.9)	6(1.3)	8(2.5)	1(1.1)
無 回 答	15(1.0)	2(0.3)	3(0.6)	5(1.6)	3(3.3)
TOTAL	1,552(100.0)	621(100.0)	480(100.0)	322(100.0)	91(100.0)

6. 福祉サービスの利用について

「福祉サービスの利用について」は「ケースワーカーと看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」と答えている比率が最も高く、「全体」で51.6%、次いで「ケースワーカーが中心になって説明すべきである」が43.0%である。ただし「混合」では「ケースワーカーが中心に」の回答の方が多い。また「精神科」は、「ケースワーカーが中心になって説明すべきである」という回答の比率が他の診療科と比べて低い(表49)。

表49 福祉サービスの利用について

	全 体	内 科	外 科	精 神 科	混 合
看護婦が中心になって患者が理解するまで説明すべきである	26(1.7)	13(2.1)	10(2.1)	3(0.9)	—(—)
ケースワーカーと看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである	801(51.6)	325(52.3)	245(51.0)	177(55.0)	44(48.4)
ケースワーカーが中心になって説明すべきである	668(43.0)	259(41.7)	215(44.8)	125(38.8)	46(50.5)
そ の 他()	20(1.3)	10(1.6)	4(0.8)	6(1.8)	—(—)
無 回 答	37(2.4)	14(2.3)	6(1.3)	11(3.4)	1(1.1)
TOTAL	1,552(100.0)	621(100.0)	480(100.0)	322(100.0)	91(100.0)

VI まとめ

1. 入院患者から訴えられる不安について

入院中の患者から、「自分の症状が担当医師に正しく伝わっているかどうか不安である」という気持ちを打ち明けられたことが、「よくある」と「ときどきある」と答えている比率を合計すると「全体」で77.3%を占めている。

「自分の気持ちが担当医師に正しく伝わっているかどうか不安である」という気持ちを打ち明けられた

ことが「よくある」と「ときどきある」と答えている比率を合計すると「全体」で82.7%を占める。

次に入院中の患者から、「自分の気持ちを担当医師に伝えて欲しいと頼まれることが「よくある」と「ときどきある」と答えている比率を合計すると、「全体」で94.6%。

「よくある」と答えている比率が最も多いのは、「精神科」の46.0%で「混合」の「よくある」と答えている比率18.7%と比べて、2倍強であり診療科による差が大きい。

これらの結果から、看護婦は患者の不安な気持ちを医師に伝える仲介の役をとっており、他科と比べて医師数の少ない「精神科」では顕著である。

入院中の患者や家族から、「よくある」と「ときどきある」あわせて95.8%の病棟看護婦が、病気、治療方法などに関して、患者や家族から不安の訴えを聞いている。

また「よくある」と「ときどきある」あわせて94.2%の看護婦が、病気、治療方法などに関することで患者本人や家族から説明を求められた体験を持っている。

入院中の患者や家族から病気、治療方法などに関して、不安を訴えられた場合、どの診療科でも7割以上が「充分とは言えないがだいたい対応できている」と回答している。

病気、治療方法などに関して、「1. 医師の説明だけでは不十分なので、患者・家族の求めがあれば、看護婦が積極的に説明した方がよい」よりも「2. 看護婦は患者に家族の不安を医師に伝え、もう一度医師に説明してもらう」の方が自分の意見に近いと回答している人が多く、2. の回答は「全体」で78.0%である。しかし「精神科」では、30.1%が1. の方が自分の意見に近いと答えている。

2. 患者や家族から持ち込まれる相談内容と頻度について

患者・家族から相談を持ち込まれる頻度を内容別にみると、「日常生活動作」については、「よくある」「ときどきある」の回答をあわせると81.5%と、8割以上が相談を持ち込まれている「食事について」

図1 各場面で患者・家族から相談を持ち込まれる頻度

	よくある	ときどきある	ほとんどない	まったくない
日常動作について (家庭復帰に向けて患者・家族から)	20.7	60.8	13.6	2.1
介護用品について (家庭復帰に向けて患者・家族から)	8.3	44.9	30.2	14.2
医療器具の紹介、使用方法、購入方法 (患者・家族から)	6.8	44.1	28.5	18.0
食事について (患者・家族から)	23.5	52.6	15.1	6.8
症状悪化の兆候と対応、連絡方法について (入院中の患者から)	17.1	49.0	22.2	6.9
福祉サービスの利用について (患者・家族から)	5.0	35.2	37.0	20.6

は、「よくある」「ときどきある」の回答をあわせると76.1%。「症状悪化の兆候と対応、連絡法方について」は、「よくある」「ときどきある」の回答をあわせると66.1%。「介護用品について」と「医療器具の紹介、使用方法、購入方法」についてそれぞれ、「よくある」と「ときどきある」と答えている比率をあわせると、53.2%、50.9%、「ほとんどない」「まったくない」と答えている比率をあわせると44.4%、46.5%と、両者とも回答が相半ばしている。

「福祉サービスの利用について」は、「よくある」と「ときどきある」という回答より「ほとんどない」「まったくない」という回答の方が多い。「福祉サービスの利用」に関して、病棟看護婦が相談を持ち込まれる頻度は、他の内容と比べて少ないといえよう（図1）。

「日常生活動作について」相談を持ち込まれる頻度を場面別にみると頻度が高いのは「入院直後」と「家庭復帰に向けて」の時期である。この2つの、「よくある」「ときどきある」の回答をあわせるとそれぞれ72.9%、81.5%を占める。一方、相談を持ち込まれる頻度が少ないのは、「退院した患者・家族から電話で」「退院した患者が外来に来たとき」である。この2つの「ほとんどない」と「まったくない」の回答をあわせると、それぞれ72.2%、68.7%を占め、先に示した2つの質問場面とは対照的である（図2）。

図2 日常生活動作で患者・家族から相談を持ち込まれる頻度・場面別

	よくある	ときどきある	ほとんどない	まったくない
入院直後	21.1	51.8	19.3	3.2
家庭復帰に向けて患者・家族から	20.7	60.8	13.6	2.1
退院した患者・家族から電話で		0.9	21.6	43.4
退院した患者が外来に来たとき		1.2	23.1	38.6
				28.8
				30.1

3. 患者や家族からの相談に充分対応できていると思うかについて

患者や患者家族の相談に充分に対応できていますかという質問で、対応できていると答えている程度をみると、「日常生活動作」については、「充分に対応できている」「充分とはいえないがだいたい対応できている」をあわせた、81.0%。「食事について」と「症状の悪化の兆候と対応、連絡法方について」は、「充分に対応できている」「充分とはいえないがだいたい対応できている」をあわせると、それぞれ、75.8%、73.7%と、対応できていると答えている比率が高い。

「介護用品について」は、「充分とはいえないがだいたい対応できている」と「満足のいく対応ができないことが多い」が、それぞれ38.0%、35.7%と相半ばしている。

「医療器具の紹介，使用方法・購入方法について」は、「満足のいく対応ができないことが多い」が，40.7%と，最も比率が高い。また「このような相談はなかった」が，19.9%である。

「福祉サービスの利用について」は，「満足のいく対応ができないことが多い」が42.8%と最も比率が高い。また「このような相談はなかった」という回答が26.4%であり，「医療器具の紹介，使用方法・購入方法について」と同様，相談そのものが寄せられることがないことも少なくないといえよう（図3）。

図3 患者・家族からの相談に対応できていると思える程度

	充分に対応できている	充分とはいえないがだいたい対応できている	満足のいく対応ができないことが多い	このような相談はなかった
日常生活動作について	11.4	69.6	11.2	5.0
介護用品について	4.2	38.0	35.7	19.0
医療器具の紹介，使用方法・購入方法について	4.3	31.4	40.7	19.9
食事について	9.3	66.5	14.6	6.3
症状の悪化の兆候と対応，連絡方法について	14.0	59.7	15.1	7.8
福祉サービスの利用について	2.3	25.2	42.8	26.4

4. 患者・家族からの相談で説明する職種

患者・家族から次のような相談を持ち込まれたとき，よいと思う説明の方法について各質問ごとにみると，「服薬」については，「医師，薬剤師，看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」という回答が最も多く，「全体」で64.4%を占めている。

「検査内容，方法，時間」などについては，「医師，検査技師，看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」と答えている比率が高く「全体」で76.4%を占めている。

「日常生活動作」については，「PT，OTと看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」という回答が最も多く「全体」68.6%占めている。

「医療器具の紹介，使用方法，購入方法」について「ケースワーカーと看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」と答えている比率が最も高く「全体」で65.5%を占めている。

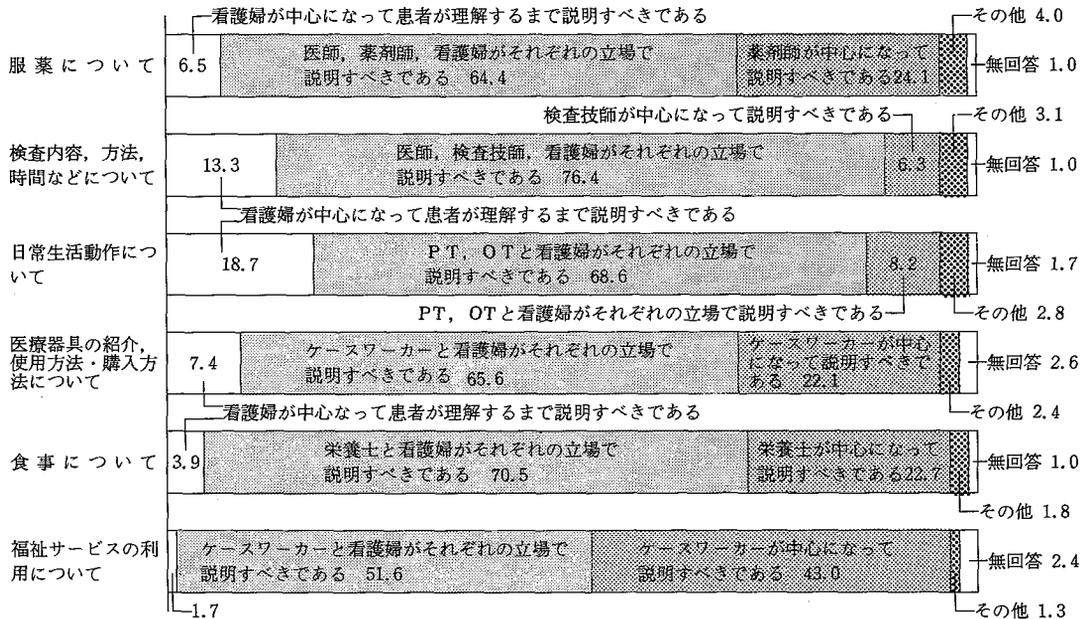
「食事」については，「栄養士と看護婦がそれぞれの立場で説明すべきである」と答えている比率が最も高く，「全体」で70.5%を占めている。

「福祉サービスの利用」については，「ケースワーカーと看護婦それぞれの立場で説明すべきである」と答えている比率が「全体」で，51.6%。「ケースワーカーが中心になって説明すべきである」と答えている比率が43.0%を占めており，他の質問と比べて，他職種に任せた方がよいという傾向にある。

それぞれの質問によってどの職種が担った方がよいのか、傾向が異なるが「看護婦が中心になって患者が理解するまで説明すべきである」と答えている比率が一番高い回答は1つもなかった。

診療科別にみると「精神科」は、他の診療科と比べ「服薬」、「日常生活動作」、「医療器具の紹介、使用方法・購入方法」、「食事」に関して「看護婦が中心になって患者が理解するまで説明すべきである」と答えている比率が高く、「他職種が中心になって説明すべきである」と答えている比率が高く、「他職種が中心になって説明すべきである」という回答の比率が低い。

図4 患者・家族からの相談で説明する職種・場面別



VII 「調査結果」を読んだ感想（自由記述）

本調査結果を調査対象施設の看護職に送り、結果についての感想を自由に記述してもらった。

1. 調査の結果をみて感じたこと

- この調査をみると、やはり看護婦は患者にとって一番身近な存在であり、仲介者としての役割も大きい。

適切な助言や情報提供には、他の職種との連携をますます強めると共に、看護婦としてどう関わるのか、さらに考えてゆく必要があると思われる。

- 医師と看護婦が、患者の状態に対するカンファレンスをしながら正しく医師からの情報を確認し、患者・家族に報告すべきであると思う。
- 病気及び治療方法に関して必要な情報が患者・家族に充分提供されないため、理解されず不安に思っ